蒼海の底

氷牙　乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蒼海の底

【Ｎコード】
Ｎ２９８２Ｊ

【作者名】
氷牙　乱

【あらすじ】
不本意ながら、いつもと変わらぬ小学生生活を送るコナンは、いつからかそれを感じるようになっていた。最初は気にもとめていなかった。けれど、それは気付かない間にすぐそこまで来ていたのだ。
そして・・・。
焦燥、不安・・・日が経つにつれ、それは増していく。そんな中、意外な人物の登場によって事態が大きく動き始めた・・・。
深く蒼い海の底。囚われたのは彼か、それとも・・・？

ｆａｉｌ．１　視線（前書き）

どうもはじめまして、氷牙　乱と申します！

え～、ご存じ「名探偵コナン」の２次創作となります。苦手な方はバックしてくださいね。

あと、オリキャラとかオリジナル設定とかも出てくるのでそういうのが苦手な人もレッツバックでお願いします。

文章等まだまだ拙いですが、よろしくお願いします。

それでは、この辺で本編の方へどうぞ～

ｆａｉｌ．１　視線

キレイダ

シミ一ツナイ白イ肌
黒ク柔ラカソウナ髪
壊レソウナ程小サナ身体
吸イ込マレソウナ大キナ蒼イ瞳

早ク僕ノモトニオイデ・・・？
ズット大切ニシテ可愛ガッテアゲルカラ・・・

蒼　海　の　底

日曜日のある日、子供たちの集まる米花公園。
彼等――江戸川コナンを含む少年探偵団はそこにいた。
コナンにサッカーを教えてもらうためだ。
人数は灰原哀が来なかったため、コナンを含めて４人だけしかいない。
元気いっぱいにサッカーボールで遊ぶ３人に、コナンは苦笑しながらも優しさをおびた瞳で見守っていた。

「ああ！」
４人でボールをパスしあっていると、そばかすの目立つ少年―円谷光彦が大きく外してしまう。
「どこ蹴ってんだよ！！」
小学１年生にしては体格のいい少年―小嶋元太が飛んでいったボールを目で追いながら叫ぶ。
「あ～！いったよコナンく～ん！！」
頭にカチューシャを着けた可愛らしい少女―吉田歩美がボールの行った方向に近いコナンの名を呼ぶ。
「へいへいっと・・・」

高く蹴り上げられた泥に汚れたサッカーボール。

走り出しながら落ちてくるボールの行方を見定めるように細められるガラス越しの瞳。

一瞬、幼いながらも整ったその顔に浮かんで消える、子供とは思えない表情。

落ちてくるボールに合わせて高く跳躍する壊れそうなほど小さな身体。

透明な汗が日の光とともに周囲に舞った。

でたらめに飛ばされたボールは、見事にその小さな胸で弾み、落下途中の姿勢のまま絶妙なコントロールで少年達の足元に戻された。
「コナン君すご～い！」
歩美が頬を赤らめながら、身軽に着地し戻ってきたコナンに言う

と、
「「コ～ナ～ン～・・・」」
「ははは・・・・」
ムッとした元太と光彦がコナンを睨みつけ、コナンは乾いた笑いを漏らすのだった。
そんな光景を、周囲の大人たちはなんとも微笑ましい気持ちで頬を緩ませて見ていた。
無関心に通り過ぎる者や互いに夢中な恋人達、そして・・・彼以外は。

――１０日後、帝丹小学校。
放課後の教室では、飛び出していく子や仲のいい子と楽しそうに話す子など、いつもと変わらぬ光景があった。
少年探偵団の面々も今日の予定や探偵団の活動などを楽しそうに話しながら帰りの用意をしていた。
「さて！帰るか！」
「４時に米花公園ですからね？遅れないでくださいよ元太君」
「んだと～！？」
「今日は哀ちゃんも来るよね？」
「そうね・・・今日は何も予定はないから・・・？」
元太と光彦のいつものじゃれあいを背に、瞳を輝かせながら聞いてきた歩美。
それに微かに微笑みながら答えようとしていた哀の言葉が突然途切

れる。
哀の視線の先には、先ほどというより朝からほとんど会話らしいものをしていないコナンの姿があった。
「江戸川君？」
哀の呼びかけにも反応せず、コナンは黙々と帰り支度をしていた。
「そういえば、コナン君今日あんまりおしゃべりしてないね・・・」
「腹減ってんじゃねーのか？」
「はは・・・元太君じゃあるまいし・・・」
コナンに視線を向けながら話す彼らに返事をすることもなく、ただのろのろと机の中の教科書を鞄につめるコナン。
しかし、特に顔色が悪いわけでも機嫌が悪いわけでもない様子だ。
反応のないコナンに探偵団の３人は首をかしげ、哀はじっとコナンを見つめ、
「・・・・」
無言のまま、コナンの肩をつかみ強く揺すった。
「うわっ！！な、何だよ灰原！」
突然のことに普段の彼からは想像できないほど大げさに驚き、我に返ったように揺すった哀を振り返った。
「・・・何だ、じゃないでしょう？さっきからぼ～っとして・・・何度呼んだと思ってるの？」
しかし彼女が呼んだのは一度だけである。もっとも誰もそんなことに突っ込むことはなかったが。
「え？・・・わ、悪い、ちょっと考え事してたんだ」
「へ～・・・朝からずっと考えなきゃならないほど深刻なことなのかしら？」
どこか剣呑な光をやどした瞳で微笑みながら哀が言えば、
「そうなの？コナン君！」
「まさかまた抜け駆けして難しい事件に立ち向かってるんじゃあ・・・」
「何だと！そんなのずるいぞコナン！！」

他の3人も騒ぎ出した。が、周りは誰も気にする様子はない。
いつもの事だからという気がしないでもないが・・・まあ、子供だから周りのことにはあまり目がいかないだけだろう、多分。
「うっ・・・そ、そういう訳じゃねーよ！ちょっと気になる事があるって言うか・・・」
「その気になることってのいうのはどんなことなのかしら？」
3人に詰め寄られ、言い訳をするコナンに哀が冷たく聞いた。
「いやだから、事件とかじゃなくて、こ、今度発売の小説のこと考えててさ・・・」
詰め寄る3人を押さえるように手を出しながらコナンが言うと、
「なんで～、つまんねーの！」
「う～ん・・・そういえばもうすぐコナン君が楽しみにしていた推理小説の発売日ですね・・・」
「コナン君らしいｖ」
「ははは・・・」
と、あっさり納得する3人と引きつった笑いを漏らすコナンをよそに、哀は微かに険しい表情を浮かべたままコナンを見ていた。

？？学校からの帰り道。
「で？」
いつものように騒ぎながら歩く元太達の後を、数歩開けてコナンと並んで歩く哀が唐突に呟いた。
「は？」
呟きを聞き取ったコナンは、意味をつかみそこねたのか哀の方を見ながら聞き返す。
「だから・・・本当は何を気にしているの？まさか、組織のことじゃないでしょうね？」
「ああ・・・」
声を潜め、僅かに真剣みを帯びた瞳で哀が重ねて問うと、何だそ

のことかと言わんばかりにコナンが呟く。
「・・・別にその事に関しちゃ、今のところ何の伸展もねーよ・・・」
「じゃあ・・・彼女のことかしら？」
「ばーろ・・・そう何度もばれそうになってたまるか」
不安が払拭され、打って変わってからかうような口調で哀が問えば、面白くなさそうな顔でコナンが答える。
「よく言うわね・・・もう何度もばれそうになって、その度に泣きついて来るくせに・・・」
「う、うるせー！泣きついてなんてね・・・っ！？」
さらにからかう哀の言葉に反論しようとしたコナンは、唐突に言葉を切り、勢いよく振り返った。

視線。
それもじっとりと纏わり付くような、粘り気のある。
殺気はない。探るような気配も。
ただ見ているだけ。なのに・・・
それははっきりと、しかし曖昧に感じる視線。

「また・・・」
「・・・どうしたの？」
「・・・・・」
「ちょっと・・・」
険しい顔のまま黙り込んだコナンに、哀の表情も僅かに変わる。
「どうしたの？2人とも」
「何かありましたか？」
「いきなり止まってどうしたんだよ？置いてっちまうぞ！」
元太達3人の声にコナンと哀はハッと我に返った。

「いや、何でもねーよ！それより早く帰ろーぜ！」
「おう！」「うん！」「はい！」
明るく言って歩き出したコナンに3人もほっとしたように素直に歩き出した。

「・・・誰かいたの？」
再び歩き出した3人を見ながら、今度は視線を動かすことなく隣を歩くコナンに小さく尋ねると、
「・・・いや、視線を感じただけだ」
コナンも同じように言葉を返す。
「まさか、それって・・・」
「心配ねーって！殺気は感じなかったし、探るような感じでもなかったからよ」
「・・・そんな視線にあなたが反応するとは思えないんだけど？」
「・・・・」
表情を動かすことなく会話を続けるが、コナンが沈黙すると会話も途絶える。
「じゃあ、また後でねコナン君！哀ちゃん！」
「それではまた！」
「遅れんなよ～」
何時の間にかいつもの分かれ道にたどり着いていた。
3人と別れ、2人だけとなっても会話は途絶えたままだった。
ほどなくコナンの居候先である毛利探偵事務所の前に着き、2人は足を止めた。
「・・・解らねーんだ。いったい何の目的で見てるのか・・・誰が何処から見ているのかも・・・」
「・・・何よそれ」
足を止めたまま顔も見ずに言葉を交わす。
少しの沈黙の後、表情無く独り言のような調子で呟くコナンに、哀は眉間に皺を寄せてコナンの様子を窺った。

「さあな。でも・・・奴等じゃねーってことだけは確かだぜ？」
「そんな事どうして解るのよ？」
打って変わって微かに笑みすら浮かべて言うコナンに、その顔を睨みながら哀も言葉を返す。
「・・・俺も随分奴らと関わってきたからな。何となく解るんだよ」
「・・・・・」
不敵な微笑を浮かべたコナンを呆れたように哀は見つめた。
「・・・何だよ」
「・・・別に、それじゃあまた後で」
そう言って去っていく哀を見送り、コナンは一瞬表情を消した。
哀の姿が消えた少し後、コナンは探偵事務所へ続く階段を上っていった。

ｆａｉｌ．１　視線（後書き）

はい、いきなり妙な文章から始まってすみませんでした。

この話はいわゆるプロローグにあたる部分となります。

なので、まだ事件は起こってません・・・起こりそうな雰囲気はあるかもしれませんが（笑）

まだ少年探偵団しか出ておりませんが、登場人物は話が進むにつれ増えていく予定です。あっ、でも、この話に大阪組は出てきません。関西弁が書けないから（笑）

こういった場で小説というか文章を発表するのは初めてなので少しドキドキです（笑）にもかかわらず、しょっぱなから連載ですみません。

そんなに長くするつもりはないのですが・・・書く時間がなかなかとれないので、更新は遅いかと思います。

でも、がんばって完結させたいと思いますので、出来れば最後までお付き合いくださると嬉しいです。

ｆａｉｌ．２　消失（前書き）

ども、氷牙　乱です。
この話は前回の続きです。
といってもまだプロローグの途中って感じなんですが・・・
それでもよろしければ、どうぞ読んでやってください

ｆａｉｌ．２　消失

アア・・・

ヤット・・・君ヲ迎エニイケル・・・

サア・・・オイデ？迎エニ来タヨ・・・

最高ノ・・・宴ヲ開イテアゲヨウ・・・

蒼　海　の　底

??４日後。阿笠邸。

日曜の夜。早ければ子供はもう眠っている時間を過ぎた頃。

明かりは点いているものの人気のなかった静かで風変わりなリビングに電話の音が響いた。

どたどた、と、少々重そうな足音とともに、全体的に丸い印象の老

人―いや、実際はそこまで年寄りという訳ではないのだが、どうしてもそう見えてしまう阿笠博士である―が現れた。
「ほいほいっと、え～阿笠ですが、どなたですかな？」
阿笠が受話器を取ると、再びリビングに静けさが戻る。
「おお、蘭君か。え？いや、今日は来とらんが・・・どうしたんじゃ？」
静かなリビングに阿笠の電話を受ける声だけが響く。
「な、なんじゃと！？」
「どうしたの？そんなに大きな声を出して・・・」
静寂を破る阿笠の叫びに、地下にいたらしい少女―哀が表情を変えず阿笠に話しかける。
「た、体変じゃ！！し、新一が・・・」
「・・・工藤君がどうしたの？」
受話器の口を押さえながら、わたわたと慌てながら言う阿笠の言葉に、哀の表情も険しくなる。
「そ、それがの、まだ帰っとらんそうなんじゃ！」
「・・・それで連絡もないのね？」
ちらりと、夜の１１時を指す壁にかかった時計を見ながら確認すると、阿笠はおろおろと頷いた。
「かして・・・蘭さん？そうよ・・・それで、江戸川君は何時ごろどこへ行くと言っていたの？」
落ち着きのない阿笠に代わり哀が事情を聞きだす。
それによって分かったことは、コナンが阿笠邸に行くといって昼過ぎに出て行ったことだけだった。
「そう・・・警察には連絡したのね・・・ええ、私達も心当たりを探してみるわ・・・
大丈夫、博士と一緒に行くから・・・何か分かったら自宅の方にかければいいのね？それじゃあ・・・」
哀が受話器を置くと、リビングに静寂が訪れる。
「博士、予備の追跡眼鏡があったわね？」

「あ、ああ、充電もちゃんとすんどるよ。それで、どうするんじゃ？」
「・・・出て行ったのが昼過ぎ・・・もし誘拐されたのだとしたら、もう受診範囲にはいないでしょうけど・・・」
「そ、そんなそれじゃ駄目じゃないのかの？」
「誘拐なら、何らかの要求があるはずでしょ？それは無かったみたいだから・・・
何かに巻き込まれて帰れなくなってるって所なんじゃないかしら」
「そ、そうじゃな・・・一応確認してみんとの」
冷静に分析する哀と心配で落ち着きの無い阿笠は、会話を終わらせると慌しく動き出した。

??毛利探偵事務所3階自宅。
珍しくテレビの音すらない静かな居間に受話器を置く音が響く。
「・・・居なかったのか・・・」
「コナン君・・・」
電話を切った蘭は、焦りに加え、どうしようもない不安に押し潰されそうになっていた。
「だあ～っ心配するなって！俺が必ず見つけてきてやるから！」
夕飯時に飲んだ酒などすでに抜けきっている小五郎は、そんな蘭に半ば怒鳴るように檄を飛ばす。
「ねぇお父さん、やっぱり私も・・・」
「駄目だ。もう遅いんだ、お前を行かせる訳にいかねぇだろうが・・・」
「でも・・・」
「お前がこんな時間に外をうろついていたと知ったら、かえってあいつが気にするだろうが」

「・・・うん、そうかもしれないね・・・・・」
弟のように可愛がっているコナンが心配で表情の冴えない蘭に、小五郎も憮然とした表情で言葉を返す。
心配ではあるが、蘭がこんな時間に自分を探して出歩いていたと知ったら、確かにコナンは気にするだろう。
そして、遅くなったことを謝りながらも怒るのだ。
コナンは自分の方こそこんな時間に出歩いていい年ではないというのに、自分より蘭の身を心配し、
蘭が危険な目にあえば、自分の身を犠牲にしてでも蘭を助けようとする。
それが分かっているから蘭は頷くしかなかった。
2人の言い合いが一段落すると居間は再び静寂が訪れる。
「・・・・お父さん」
「ん？」
外に出るための用意をしていた小五郎に、蘭が不意に声を掛ける。
「大丈夫だよね？・・・コナン君、いなくなったり・・・しないよね？」
泣きそうな娘の顔に、上着に腕を通していた小五郎は動きを止める。
「・・・・・」
「お父さん」
無言のまま居間を出て行く小五郎に、蘭はそれを追いながら縋るように再び声を掛ける。
「お父さ・・・」
「・・・アイツは・・・コナンはあの生意気な探偵坊主みたいに何も言わないまま行方をくらましたりしねぇよ」
玄関の扉を開けたところでそう静かに呟くと、小五郎は後を振り返ることなく駆け出して行った。
「・・・お願いだから・・・・帰ってきて・・・」

?.?.翌日。
捜索は明け方まで続けられたが、何の進展もないままコナンが帰ってくることも連絡をしてくることも無かった。
結局、コナンの足取りは毛利探偵事務所を出たのを最後に途絶えていたのだった。

ｆａｉｌ．２　消失（後書き）

はい、２話目はこれで終了です。

今回は哀ちゃんと阿笠博士、蘭ちゃんと小五郎が出てきました～。
で、コナン君がいきなりいなくなっちゃいました！
けど、コナン君も言ってたように組織の仕業ではありません。
蘭ちゃんが思いっきり心配してます。でもでも、大丈夫だよ！蘭ちゃんを不幸にすることだけ！はないから！（すみません、新一＆コナン好きが転じて、蘭ちゃん至上主義なもので（笑））

何だか小五郎のおっちゃんが思いのほかかっこよくなったような気がします。
が、いつまでかっこいいおっちゃんでいられるかは謎です（笑）

待たせることなく、続きが出せて良かったです・・・次も、早く投稿できるといいな・・・気が乗らないと進まないのでいつになるかは分からないんですが、一応数話分のストックがあるので、それほどお待たせすることはないかと・・・

あ、読みにくいとか、分かりずらいとかのアドバイス等があったらどうぞおっしゃってください。もちろん感想も！泣いて喜びます（笑）

それでは、ここまでお読みくださってありがとうございました！
また、お会いできることを祈ってこれにて失礼いたします！

ｆａｉｌ．３　虜囚（前書き）

どうも、氷牙　乱です。

第３話のお届けです。

あんまり進んでないですが、それでもよろしければどうぞ読んでやってくださいな。

ｆａｉｌ．３　虜囚

ヨク来タネ

サア・・・宴ヲシヨウ

ズット・・・ズット・・・

モウ・・・ニガサナイ・・・

蒼　海　の　底

??毛利探偵事務所。

「行って来るね！蘭姉ちゃん！」

「行ってらっしゃい、コナン君！遅くならないようにね！」

玄関口で可愛らしい少年の声が響きそれにに柔らかな声が答えた。

毛利探偵事務所の居候である江戸川コナンと娘の毛利蘭である。

コナンは、蘭の言葉に子供らしく答えながら駆け出していった

「さてっと・・・こっちはあんま伸展してねーけど、あっちは何か伸展してるかも知れねーからな・・・」
　呟きながら通りに出ると、迷い無く阿笠邸にと続く道を走り抜ける。
あと少しで阿笠邸が見えるというところで、向かう先から男が一人歩いて来ていた。
視界の端にその姿を捉えながらも別段気にすることなく通り過ぎようとした時・・・
「・・・江戸川、コナン君・・・」
　男―これといった特徴の無い男で、強いて言えば特徴が無いことが特徴といえた―が唐突に名を呼んだ。
目が合ったわけでも、どちらか一方が見ていた訳でもなく、本当に何の前触れもなく。
そして、その声が聞こえたと思った瞬間に、コナンの視界は闇に閉ざされていた。

　コナンが目を覚ました時、最初に目に入ったのは闇だった。
僅かな光すらない闇。
「・・・！？」
　コナンは飛び起きようとして、それが叶わない事を知る。
手足を拘束されている訳ではない。
ただ身体が動かず、声すら出せなかったのだ。
手足はもちろん顔の表情すら動かせそうに無いほど、全身が脱力し

ていた。
それなのに妙に意識と感覚だけははっきりとしていた。
コナンは出来うる限りの情報を得ようとした。
最も視線しか動かせない状態で分かったことは、目隠しをされている、という事だけだったが。

??どれくらいたったのだろうか・・・
闇しかない状態では時間の感覚すらなくなる。
それでもこうなった経緯を考えようとして、結局、全く何も分からないことを理解しただけだった。

??ガチャン・・・キィー・・・
不意にそんな音が響く。どうやら扉の開く音のようだ。
しかし、人の気配はなかった。
風で開いたのだろうかとコナンが思い始めた頃、
「やあ・・・お目覚めかい?」
「・・・!!!」
唐突に・・・本当に唐突に耳元に声が届く。
すぐ傍にいるはずなのに、それでもなお人の気配はなかった。
「ああ・・・ごめんよ、驚かせてしまったね・・・」
至極喜悦を含んだ声。低く、耳に響く声。
やはり、何の気配も感じなかった。

声とともに感じるのは気配ではなく視線。
ねっとりと絡みつくような・・・

「・・・!?」
それを感じた瞬間、コナンは思い出す。ここ最近、何度となく感じていた視線を。
唐突にその視線に込められた意図を理解する。そして気付いた、自

分は囚われたのだと。

その日はいつもの様に、阿笠邸で今後のことを話し合おうとしていただけだった。

始終警戒していた訳ではないが、油断していた訳でもない。

自分の能力を過信していた訳でもない。

それに何か理由があるとするなら、ただ、その時の自分では抗いようが無かっただけだ。

ｆａｉｌ．３　虜囚（後書き）

はい、短いですが今回はここまでです。

ようやくコナン君の現状が出てきました。なんだかピンチです（笑）囚われてしまったコナン君は、もちろん大人しくしてる筈ないんですが、今回は（話の都合上）大人しく囚われの身になってもらいました（笑）

囚われの姫君（笑）状態で、こんなのコナンじゃねー！というご意見もあるかと思いますが、弱々しいコナン君を書きたいわけではないので、もうしばらくご辛抱くださいな。

それでは、次回も読んでいただけることを祈りつつ、これにて失礼させていただきます。

ｆａｉｌ．４　捜索

どうか・・・無事でいて・・・・

帰ってきて・・・・

お願いだから・・・・

私を一人にしないで・・・・

・・・・・傍にいて・・・・

蒼　海　の　底

深い、深い森の中。

昼なお暗い森の、まるで獣道のようなそこを進んでいくと、急に視界が開き、それは唐突に姿を現す。

それはいわゆる豪邸といっていい大きな屋敷だった。

それは、周囲に違和感を与えるほどの白い印象が全体を覆い、それでいて随所に施された赤みを帯びた茶色の飾りが、まるで溶け込むかのように周囲と調和している。

趣味のいい外観ではある。が、そこが人目にさらされることは殆どないといっていい。

そこ、とは豪邸。そこ、とは深い森の中。そこ、とは・・・彼の、絶対領域(テリトリー)。

「・・・わかったかな？君が今どういう状況にあるか」

「・・・・」

指先一つ動かすことができず、目隠しをしたままのコナンの耳元に、良い声、と言っていいだろう低い声が響く。

やはり声の主の気配は全く感じられなかった。

耳は聞こえているので認識できるし、その内容も理解できるのだが・・・はっきり言ってコナンは物凄くムカついていた。

表情一つ動かすことが出来ないのでそれが相手に伝わることはないだろうけれど。

「ふむ・・・まだ薬が身体に慣れていないようだね・・・」

（薬？）

コナンは彼のその言葉に自分の身体の現状をほぼ正確に理解した。

（なるほどね・・・ったく、いったい何を盛ってくれたのやら・・・）

そしてさらにムカついていると、

「しかたない・・・反応がないと言うのもつまらないからね・・・」

彼のそんな呟きとともに、視界が開く。

「・・・・・」

突然開かれた視界に、随分と高い位置から注がれる陽の光が眩しくて、コナンは目を細めた。

「うん・・・やはり・・・きれいだ」

そして、自分を覗き込む彼の存在を、ようやく声と視線以外で捉える事ができた。

「・・・・そう睨まないでくれ・・・せっかくの綺麗な瞳が台無しだ」

彼の存在を視覚で捉えると同時に睨みつけたコナンに、彼は苦笑しながらコナンの頬に触れた。

（！？）

・・・もしこの時、コナンが表情を作ることができたなら盛大に引きつっていただろう。

そして、体を動かすことが出来たのなら全力で逃げ出していたに違いない。

しかし、コナンはそのどちらもすることが出来なかったので、黒目がちの大きな瞳をさらに見開き、そのまま固まった。

「うん、そういう表情はすごく可愛いよ・・・」

彼はそんなコナンに、クスクスと笑いながら愛おしそうに頬をな

でた。

それが、そこでのコナンの生活の始まりで、この時コナンが動くことが出来なかったことが、後に大きな意味を持つことになった。

コナンが最初から動ける状態であったのなら、認識した敵である彼に対して何の躊躇も無く攻撃し、さっさと脱出を図っていただろう

・・・・その意味に気付くことなく。

??毛利探偵事務所。

「やはり、コナン君の姿を見た人は誰も居ないようです」

「・・・今日から捜索範囲を都内全域及び近県に広げる予定です」

少し早い朝の空気に似合わぬ、重苦しい空気をまとった男女の声がひびく。

事務所の応接用のソファに座る2人――高木・佐藤両刑事による

コナン捜索に関する経過報告である。

「・・・どうぞ」

事務所の奥から制服姿の蘭が現れ、硬い表情に何とか笑みを浮かべながら2人と、その前に座った不機嫌そうな、否、不機嫌そのものの小五郎にお茶を出す。

「あ、どうも」

「ありがとう、蘭さん・・・それで、やはりコナン君からの連絡も身代金等の要求も無いんですよね？」

「・・・・・・」

どこか低姿勢で礼を言う高木と笑顔で蘭に礼をいい、真剣な表情で小五郎に訊ねる佐藤。

それとは対照的に、小五郎は、押し黙ったまま不機嫌顔を隠そうともしなかった。その余裕もないのかもしれない。

「お父さん・・・」

そんな父の様子に、蘭が困ったように声を掛けると、

「・・・ったく・・・何なんだいったい、あいつも探偵を気取ってんなら何か手がかりくらい残しておけってんだ！」

蘭の注意を受けてさらに、憮然とした表情で苛立ちを隠そうともせず小五郎が言う。

そんな小五郎の様子に、蘭と佐藤、高木は顔を見合わせて笑った。文句を言いながらも小五郎がコナンを心底心配していることが分かったからだ。

僅かに明るくなった空気の中、本の少し会話が途切れた。

「・・・もう3日、経つんですよね・・・コナン君いなくなってから」

「そうね・・・あの子がそう簡単に誘拐されたりするとは思えないんだけど・・・」

「そうですよね・・・となると、何かの事件に巻き込まれたとか・・・」
「でも、それらしい事件があったなんて報告無かったわよね？」
「う～ん・・・・」
沈黙の中、不意に真剣な表情になった高木がそう呟くと、佐藤も同様に真剣な表情で考え出した。

「・・・コナン君・・・」

そんな2人の会話に、笑顔から一転、蘭が泣きそうな顔で俯いた。
「ああっだ、大丈夫よ、蘭さん！コナン君は必ず見つけ出すから！！」
「そ、そうですよ！あのコナン君がそう簡単に捕まったり殺されたりしませんって！・・・あ！」
そんな蘭の様子に慌てたように言いつくろう2人だが、高木の言葉に蘭はさらに顔を歪ませ、佐藤は
「ばかっ・・・」
と小さく呟いて片手で顔を覆った。

なんとも気まずい沈黙が辺りを覆う。
それを何とかしようと、声を出しかけては押し黙る高木と顔を覆ったまま動かない佐藤だった。

「え、え～と・・・そ、それじゃあ、これで失礼しますね！」
「・・・何か分かったらすぐに連絡入れるから！」
暫らく後、佐藤と高木は勢いよく立ち上がりながらそう言うと、その沈黙から逃げるように去って行った。

「コナン君・・・」

「・・・だあ！辛気臭い顔してんじゃねえ！アイツは大丈夫だつってんだろうが！」

泣きそうな蘭に小五郎は勢いよく立ち上がって怒鳴ると、乱暴な所作で仕事用のデスクに行き、椅子に座って背を向けた。

「でも・・・こんなこと初めてだよ？

コナン君が何の連絡も手がかりも無いまま行方をくらませるなんて・・・」

「・・・いいからお前は学校に行け。・・・遅刻するぞ」

「そんな・・・コナン君、まだ戻らないのに・・・」

「お前な～っ・・・昨日も一昨日も休んでんだぞ？

・・・知り合いの家も、公園なんかのあいつの行きそうな場所も全部探した。

・・・休んだところで、これ以上お前に出来ることなんかねぇだろうが」

「・・・っ！？」

背を向けたまま諭すように静かに告げる小五郎に、蘭は言葉に詰まる。

心配で学校になど行く気になれない。けれど、もはや個人で出来ることはしてしまい、蘭に出来ることはない。

それでも蘭は、何かしたいと思っていたのだ。しかし・・・

「・・・・分かった・・・でも」

人に―父親にそうもはっきり告げられると、頷くしかなかった。
頷きながらも、納得していない声音で呟く蘭に、小五郎も憮然としたままその先を待つ。
「・・・何だ？」
「・・・・・何か分かったらすぐに知らせて・・・お願い」
学校に行く用意をするために自宅に向かいながら蘭は静かに懇願する。
「・・・わぁってるよ」
そんな娘に、小五郎は苦笑しながら答えた。

？？事態が進展したのはそれからさらに3日後のことだった。

ｆａｉｌ．４　捜索（後書き）

どうもお久しぶり！な氷牙　乱でっす！！
ここまでお読みいただけてものすごく幸せです！

ちょ～っとお待たせ（ってほど読まれてないか・・・）してしまいましたが、「蒼海の底」第４話目の投稿でございます！

今回は捕まっちゃったコナン君の様子と、コナンが消えた後の毛利家の様子です。
お楽しみいただければ幸いかと・・・
そして、高木と佐藤が新たに登場しました！っても本の少ししか出てないですけど・・・

んでは、次はなるべく間を空けずに投稿したいと思いますので、どうぞ最後まで読んでやってくださいな。

氷牙　乱

ｆａｉｌ．５　進展

深く碧い・・・鮮やかな深緑だけが覆う世界

君がいない、世界・・・

帰りたかった・・・けれど・・・

蒼　海　の　底

深い闇が支配する森の夜。
館の周囲は時折聞こえる風の音以外、鳥の声すらしなかった。

未だ囚われの身であるコナンは、縛られることなく最初に寝かされたベッドに横たわっていた。
そばに彼の姿はない。監視カメラや盗聴器の類も。
侮られているのか、ただのバカか・・・どちらにしろ・・・

（・・・ムカつく）
ようやく少し動かせるようになった体を確認しながらもコナンはそんなことを考えながら不機嫌全開だった。
ある程度自分の身体の具合を把握すると、ゆっくりとした動作で上体を起こす。
「・・・はあ」
（まだ・・・逃げ出せるほどには回復していない、か・・・）
そう考えながら、コナンはまだだるい体を壁に寄りかからせ、楽な体制をとると頭を垂れて息をつき、そのまま思考に沈んだ。
（・・・さて・・・あいつの気配は読みにくいんだが・・・）

昼間、攫われてからの時間ははっきりとしないが、彼の話からそれほどたっていないことは確認済みである。
そして、ほんの十数分前。彼はコナンに夕食を食べさせた後は姿をみせていない。
始めは全く分からなかった気配。
しかし、彼はまだ明るかった時間から夜の闇が支配する時間までコナンの傍にいたため、コナンも多少把握できるようになっていた。

（・・・近くには・・・いない、か・・・）
そう考えながらも更にあたりの気配を探るため、神経を研ぎ澄ませて行く。

普段、なにげなくしているよりもより鋭く、深く。
屋敷の中、外・・・自分の居る部屋から徐々に遠くへ。

「・・・！？」
ベッドに座ったまま頭を垂れ、気配を探っていたコナンが唐突に顔を上げる。

その顔に驚きの表情が広がる。

「人が・・・いる？」

自分とアイツ以外に？

？？バンっ！！

「だあ～～～！！！」

もう夕方も過ぎ、辺りを夕餉の匂いが包みだす頃。
事務所のドアを乱暴に開けながら入ってきた小五郎は、仕事机に荒々しく座るなりそう叫んだ。

「お、お父さん？」

そんな父の様子に、何処となく寂しそうに部屋の掃除をしていた蘭が驚いたように振り向く。
しかし、その様子から状況が分かった蘭は悲しそうに俯いた。
小五郎もそのまま言葉を発することがなかったため、部屋に沈黙が落ち、気まずい空気が覆った。

「・・・・なんでもねぇ・・・悪いな驚かして」
「・・・やっぱり見つからないの？コナン君・・・」
蘭の様子に、きまり悪そうに小五郎がそう言ったが、蘭はそれを無視して泣きそうな声で確認する。
「・・・・・・・ああ」
随分長い間を開けて返された父の答に、分かってはいてもどうしようもない不安が蘭を襲う。

「どうして・・・」
「・・・大丈夫だっつってんだろ！そんな顔してんじゃねぇ！」
「でも・・・」
「・・・・信じるしかないだろう」
「え？」
泣くのを堪えるように俯いた蘭はそんな父の言葉にきょとんとした顔を上げた。

心底不思議そうな娘の反応に、小五郎は少し気分を害しながらも言葉を続ける。
「あいつの両親は今いないんだ。だから俺たちが信じてやるしかないだろう」
あいつは、コナンは無事だと。
「お父さん・・・・」
そっぽを向き、口調もどこかぶっきらぼうなままの父の言葉に、蘭は目を見開き、次いでふわりと微笑んだ。
「うん・・・そう、だね」
「ふんっ！」
そんな蘭に自分で言ってて恥ずかしくなったのか、小五郎はさらに明後日の方向を向いてしまったのだった。

「そこまで信用してもらえていたとは・・・あの子も喜ぶでしょう」
と、そんな和やかな空気をぶち壊すかのようなタイミングで落ち着いた低い声がひびく。
「「！！！？」」
気配もなく現れたその人物に、蘭も小五郎も驚いて入り口のドアを振り向く。
「な！？あ、あんたは！！」
「新一のお父さん！？」
そう、唐突に現れたその人物は工藤新一こと江戸川コナンの父、？？工藤優作その人であった。

ｆａｉｌ．５　進展（後書き）

ど、どうもお久しぶり・・・どころではないですね（汗）
氷牙　乱です。
待っている方がいるかは分かりませんが、ようやく続きを投稿できました。

以下、言い訳です・・・
実は、ＰＣが壊れてネットができない状態が続いてまして・・・
新しいＰＣ購入し、さて書くか！と意気込んでは見たものの、さっぱり小説の書き方を忘れていました。
ようやく納得いく形になったんで投稿に至ったわけです。
・・・なので実はこの続きもまだ全然書けてないです（汗）
話の大筋は決まってたはずなんですが、時間がたったせいでエピソードが増えて、話が変わってしまったり・・・

と、いうわけで・・・
続きはなるべく早く仕上げたいとは思いますが、いつになるかは分かりません。
ので気長にお待ちいただけると幸いです。

それではまた、いつか（なるべく早く）お会いできることを祈って・・・

氷牙　乱

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2982j/

蒼海の底

2010年11月16日10時10分発行